
最硬の肉体を持つ一般人

放浪の焼きそば売り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最硬の肉体を持つ一般人

【Nコード】

N6125Z

【作者名】

放浪の焼きそば売り

【あらすじ】

耐久対魔対呪硬化EXの転生者がいたらどうなるか、という私の興味で書く二次創作です

主人公設定（前書き）

主人公の設定です。

食人鬼書かなきや……………

主人公設定

主人公名：玄武甲羅げんぶ かいら

性格：基本的にのんびりとしており、温和で争い事は好まない
でもぶっちんするとどっかから鎖で亀甲縛りした直径約1mで約7
kgの甲羅で攻撃してくる。

原作知識はうるおぼえ

魔術回路もない。だが使っている甲羅が神の加護を受けている為、
甲羅を使つての攻撃は当たる。

ステータス

筋力：E

耐久：EX

俊敏：E

幸運：C

宝具：？

保持スキル

硬化：EX

感想で指摘があつたので急遽つけたスキル。攻撃を認識しなくても
硬化して自身の身を守る。怪我もしないというお得

指摘してくれたお方に感謝

衝撃吸収：A

投げられた卵も衝撃では割れない。

硬いからどっちみち割れる。

対魔力：EX

魔術？なにそれ美味しいの？状態。

魔術師涙目

対呪：EX

呪いなんてなかった。と言わんばかりのスキル。

アンリマユエ……………

回復：C

常人離れした再生力。でも硬化EXだからエヌマエリシュやられなきやこのスキルは出番がない

えいえんのにばんて：EX

温和な性格故相手から攻撃を受けたりぶちぎれたりしないかぎり攻撃しない。

緑色の配管工と友達になれそうなスキル

主人公設定（後書き）

うひー今からプロローグ書かなきゃ

誤字あったら指摘してつかあさい

戦闘員一名様、耐久の指摘有難う御座います

「そうですか。死体はどうになりました？私は一人暮らしで山にある家に引きこもっていたので気になります。」

「死体は……食品に入れられている防腐剤が体に溜まり死後硬直で縁側に座ったまま腐らずに、仲良くしていた野生の動物以外は10年間誰も気付かず放置されていました。」

「そうですか、森のみんなは気付いてくれましたか。」

「動物達は大丈夫でしょうかねえ、時々餌を上げてましたが……」

「じ、自分が何故20代の若さで自然死したのか気にならないんですか？」

「20代で死んでもそれは自然の摂理ですからねえ」

「それにしてもなんで20代でこんなに老成したんでしょうかねえ」

「そ、そうですか……あ、実はまだ死ぬべきではなかったので転生して頂きたいのです……」

「転生……輪廻転生の類でしょうか。……そういえば」

「あなたの誰ですか？私は玄武甲羅です。」

「あ、これはご丁寧に……神の石柱のアマテラスです。………つてちがー……うー！！！！！！！！！！」

「なぜ吠えているのでしょうか……熊の滝太郎（5歳）を思い出しますねえ」

「いやあ、親とはぐれたあのこを育てるのは大変でした。私が23歳の頃に……」

「あなたには転生してもらいます！それとチートもつけます！」

「ち、ちいと？ああ、私がまだ高校生の時に聞きましたねえ。あの時はくろれきが多かったですねえ……野良猫に富士山とつけたり、野良犬にお米とつけたり。ああ、そういえば釣った鰻にイワナとつけましたねえ……」

「き、聞いているんですかあ！？」

「聞いていますよ。只昔を懐かしく思っているだけですよ。」

「……28なのになんでこんなに枯れているんですかあなたは……」

「……」

「なんででしょうかねえ……」

「もういいです。それでチートですが」

「あらゆる攻撃とかをくらってしまっても大丈夫な肉体が欲しいです
ねえ。滝太郎と遊んでいる時に怪我をしてしまいましたし。」

「わかりました（多分E X級でやっと切り傷やしもやけ、やけどに
なつて魔力とかを無効化、衝撃を吸収する肉体が欲しいんですよ

……）」

「？」

なにかとんでもないことになりそうですが……まあいいです。

「おまけに武器でもあげます。暴走した動物を鎮静できるように」

「ん〜でしたら鎖がいいですねえ。前に滝太郎が暴れた時に縄では
抑えることができませんでしたから。」

「はい、わかりました。それではよい世界を」

「第二の人生ですか。楽しみです。」

「あ、テンプレで穴が開きます。」

え？

パカッ

「なんということでしょうおおおおおお……」

……」

「匠の技で見事に落ちていきました……って何を言ってるんですか
私は」

ブローグですねえ（後書き）

劇。ビフ。ーアフターが作者は好きです

そういえばアフターのときに流れるピアノの曲の名前はなんでしょうかね？私は知らないのです。

つきましたねえ（前書き）

通知表……3が4つしかありませんでした。
あと全部2つて……高校、大丈夫かな

つきましたねえ

「……………おおおおおおおおお！！
いたっ！」

な、なんで穴なんでしょうか……それに何故私は怪我を……ああ、
そういえばがんじょうな肉体からだをもらったんだした。この年で物忘れ
は勘弁したいです。」

ころころと笑い自分がどこにいるのか玄武は推測する

（ここは……見たところ森でしょうね……。ですが動物の気配が
ありませんね）

森で動物の気配がない。というのはおかしかった。たとえ冬で冬眠
していても微かな気でわかる。

（ああ、雪ですねえ。私のところでは雪が多く積もって大変でした。
）

しかしそこで違和感

（はて、何故寒くないのでしょうか。）

そう、寒くないのだ。死んだ時に秋とはいえ服は冬では寒いだろう
と思われる服なのに

アマテラス

（甘寺素さんのおかげでしょうか。これはありがたいです。）

この男、神話は全く知らないのだ。おまけに山で籠もって自給自足
の生活をしていたため機械類に疎い。その疎さはどこぞのうっかり
並みだ。

「そこにいるのは誰ですか！！ここに何の用だ！！」

「おやあ？」

声をした方を見ると黒一色の服を着て何か武器を構えてるように見
える少女がいた。

「私は玄武甲羅ですよお」

「何をしにきたかを言いなさい！！」

「んゝ森の気配を探っていました。」

「ッ！貴様マスターか！！」

「ま、ますたー？」

「惚けても無駄だ！！」

そう言い切りかかるようにくる少女。

そして不可視の剣が玄武に直撃する。

「ボケてないですよ。まだ私は28歳です。それと、今の音と私の頭の何かが当たったようなのは何ですか？」

直撃するが無傷。しかも攻撃されたことに気付いていない。

「ッ！？」

少女はうろたえたがやはり歴戦の騎士。すぐに思考を回復させて次の攻撃を行う。

ストライクエア
「風王鉄鎚！」

（この男はおかしい。何の魔力もないのに私の剣を受けきったことが。ならばここは一時引いて……）

そして空気の塊は玄武に当たり

「？」

霧散した。

「そ、そんな……」

ここで黒服の女騎士の直感が働く。

（この男はおかし過ぎる……エクスカリバーを受けきったりストライクエアを霧散させたり……メイガス（魔術師）か？だが演技には見えない。）

「あの、あなたはメイガスではないのですか？」

「めいがす？なんですかそれは」

「そうですか。ではここに来た理由は？」

「森に動物の気配が一切なかったので気になって来たんですよ。」

「やはり……一般人でしたか。」

「？ところでその剣はあ？さっき持ってなかったようにみえましたがあ」

「え！？ああこれは……そ、そう手品です！！」

「ほへへ、すごいですねえ……」

（あ、危なかった。もしこの男が頑丈でなければ一般人を殺してしまふところでした……）

「ところで、森を抜けるにはどうしたらいいのでしょうか？」

「へっ？こ、こっちです。」

「有難う御座います。」

（これは無視されていても切継に報告した方がよさそうですね……）

「（マスター、一般人が森に迷いこんでいたので森の外へ案内します。）」「

「（……）」

（やはり無視ですか……）

騎士の少女とそのマスターの溝は深くなっていく……

つきましたねえ（後書き）

最初英霊にしようかと思ったんですが……一般人なので一般人のま
まいこうと決めました。

食人鬼の方もちゃんと投稿します。
誤字があれば報告してください。

修正しました

衛宮さん視点ですねえ（前書き）

一般^{サブ}人が食人鬼^{メイン}のお気に入り件数越えました。
……泣こう

衛宮さん視点ですねえ

ーペロリスゲフンゲフン…

ー某テロリストー

有り得ない……魔術師でもないのにセイバーの一撃を受けきった…

…！？

本当にサーヴァントではないのか……？

それに攻撃されたことに気づいていないなんて……いや、僅かに攻撃される前に顔をしかめた。

殺気を感じてはいるようだ。

こんな一般人がいるのだろうか……結界の外側でかかったのではなく内側で反応した……。つまり何もない空間からそこに現れた。魔法使いか？ いや、魔力は感じない。

……止めだ。この男は謎過ぎる

サーヴァントの攻撃を無効化するなんて封印指定並みだ
危険なものは早めに……

「ねえ切嗣、どうしたの？」

「なんでもないよ、イリヤ。お、またクルミを見つけたぞ。」

「え！？どこどこ！？」

「あはは、あれだよ、あれもクルミの一種。でも食べることは出来ないんだ。」

「むー！切嗣ずっとズルしてたあー！！」

「はは、ごめんよイリヤ」

「（マスター、一般人が森に迷い込んだようなので森の外に案内してきます。）」

セイバーから念話^レがきた。でも僕は

「……………」

無視した。道具に感情はいらない……。

衛宮さん視点ですねえ（後書き）

行間をあけたほうが読みやすいとありましたのであけてみました。

読みやすくなつてでしょうか……………？

切継さんを切嗣さんに修正しました。

倉庫街ですねぇ……………（前書き）

一般人の感想数が食人鬼を越えた……………
ゴファッ（吐血）

倉庫街ですねぇ……

ー主人公ー

黒スーツ（セイバー）さんから森の外へ案内してもらったのはいいんですがあ…………

「ここ、どこでしょうかねぇ。」

絶賛迷子中です。

~~~~~  
数時間後  
~~~~~

本当にここどこでしょうか。

お金がないので食事出来なくてお腹がすきました……
働きたいで御座るう、働きたいで御座るう……。

おやあ？、ここはどこでしょうか……？
どうやら倉庫……がいつぱありますねぇ。
むう？なにやら防御率が二段回低くなりそうな金属音が…………

ーランサー&セイバーー
ちよつと時は遡る

「よくぞ来た。今日一日、この街を練り歩いて過ごしたものの、どいつもこいつも穴熊を決めこむ腰抜けばかり。……俺の誘いに応じた猛者は、お前だけだ」

低く、嬉々とした声で讃える二槍の男……ランサーのサーヴァント

は、自然体でその猛者に問い掛ける。

「その清涼な闘気……セイバーとお見受けしたが、如何に？」

「その通り。そういうお前はランサーに相違ないな？」

「如何にも。……フン、これより死合おうという相手と尋常に名乗りを交わすこともままならぬとは。興の乗らぬ縛りがあったものだ。」

ランサーの言葉にセイバーも顔を弛緩させた。同意見のようだ。

「是非もあるまい。もとより我ら自身の栄誉を競う戦いではあるまい。お前とて、この時代の主のためにその槍を捧げたのдарう？」
「ふむ、違いない」

ランサーは苦笑する。

これから殺し合うようには聞こえないが実際は殺気が飛び交っている。サーヴァントの殺気を耐えられるアイリさん何者。

「我が主に勝利を捧げるべく、こうして好敵手が来るのを待っていたが、招きに応じたのが最良と名高き剣の英霊とは僥倖だった。」
「ほう、尋常な勝負を所望であったか。誇り高い英霊と相見えたのは私にとっても幸いだ。」

お互いに笑みを浮かべ、戦闘体勢へと移る。
ランサーは己がエモノの二槍を構える。

それは不死鳥が翼を広げる姿を幻視させる。
セイバーも黒のスーツから愛用の白銀の鎧へと早変わりする。その手には不可視の、魔力で包まれた聖剣が握られている。

「それでは……いざ。」

ー主人公ー

な、なにやら物騒な雰囲気にい〜。

止めた方がいいのでしょうかあ……ってあそこに別のヒトkもとい人影が……。

……ポケモ。ネタ多いですねえ。

……むさいおっさんと女の子に見える男の子のペアって誰得なのでしょうかあ……。

「あのう〜」

「おわっ!？」

めっちゃ吃驚されました。こっちが吃驚しましたよう。

「おう？坊主、いつからおった？」

ぼ、坊主……私はこれでも28なのですが……それと私は存在感があまりないのでしょうか……。

「ついさっきですよ、道を聞きに来たのもうひとつ聞きたいことがあるのですが……。」

「ほう、その質問とはなんだ？」

い、威圧感が凄いですねえ、歴戦の戦士そのものです。

「あの人達は一体何故殺し合いをしているのですか？」

それをいうと某蛇傭兵の声の男はキョトンとした顔のあとぶわっはっはっはと笑いました。

なにか……変なこと言いましたかね？

「ああすまん、警戒していた余が馬鹿らしくなってな。」

「あ、暗示が効かない……………」

「そ、そうですかあ……………。ところで少年は何をしようとしているのです？」

「い、いや何にも……………。（まさか一般人！？なんでこんなところに！！）」

「おっどうやらランサーが宝具を使うようだぞ？」

そして騎兵とそのマスターとおまけの一般人は二人の戦いにどこぞの隣の晩御飯番組のように突撃する

倉庫街ですねえ……（後書き）

ドスやってて思ったんですがラオシャンロンってどうやって生殖するのでしょうか

安西先生、出番がないです。（前書き）

ちょ……………ユニークが約2日で1万9千越え……………！？
夢？

安西先生、出番がないです。

『戯合いはそこまでランサー』

静寂を破った冷淡な声が響く。

「ランサーの……………マスター……………！？」

驚きと共にアイリスフィールドが辺りを見渡すが人影はない。どうやら遠距離から遠見をしているようだ。

穴熊を決めこんでるのはランサーのマスターも同じではなかるうか。

『これ以上勝負を長引かせるな。そのセイバーは難敵だ、速やかに排除しろ。宝具の開張を許す。』

「了解した。我が主よ。」

マスターへの返答が終わると共に急激に殺気を研ぎ澄ませるランサー！。

そして構えを改め、左手の短槍を放り捨てた。

その行動に動揺したがセイバーは平常心を取り戻し右手の宝具を凝視する。

長槍に巻かれた呪符がペリペリ……………と剥がれていく。

剥がれていく様を見ているとそれを自分も剥ぎたくなってくる自分は異常だろうか。

閑話休題

呪符が剥がれ現れたのは、穂先から柄まで赤い真紅の槍。その穂先から禍々しい魔力が揺らめいている。

「そういうわけだ。ここからは殺りにいかせてもらおう。」

そう低く呟き、ランサーは先程までの鳥のような独特な構えとは違い、セイバーも見慣れた構えをとる。

同時にセイバーも構え直し、先程以上にランサーの動きと槍に注意を向ける。

宝具の効果の発揮は大きく分けて二つである。一つはセイバーのもつエクスカリバーのように真名開放とともに爆発的な威力をもつタイプ。

そしてもう一つは武器自体に宝具としての能力が付加されたタイプである。

こちらのタイプは一撃必殺としての威力が欠けるが、常に効果を發揮するため戦闘で優位に進めることが出来る。

第5次聖杯戦争のバーサーカーの十二の試練がそれである。

セイバーの見立てではあの槍は後者。次で決めるといふ気迫が感じられないため、引き続き戦闘を続行して此方を仕留める腹づもりだろうと。

先に動いたのはランサーだ。二槍の時とは違う正道の突き。愚直なまでの突進をセイバーは剣で受け止める。が。

「な!？」

槍の穂先と剣がぶつかった瞬間、剣に纏っていた風が剥がされ、突風となり両者の足場を崩す。

「晒したな、秘蔵の剣を」

「……………」

ニヤリと笑うランサーに解せないという沈黙するセイバー。ここで攻撃しないランサーはやっぱり騎士である。

「刃渡りも確かに見て取った。それでもう見えぬ間合いに惑わされることはない。」

宣言と共にランサーが先程とは比べものにならない程の勢いでセイバーに次々と突きを繰り出す。

セイバーも自らの獲物で槍を捌くが。

徐々々に焦りが顔に浮かんでくる。理由はわからないが真紅の槍と自分の剣で打ち合うたびにインビジブル？エアが乱れて剣の姿が暴かれるのだ。

だがこの程度でひるむことはない。

セイバーはランサーの突きやなぎはらいの中に比較的浅いものが混じっていることを気づいた

これならば己の鎧で防ぐことができる。

そう判断し、セイバーは袈裟斬りのカウンターの一撃を繰り出した。鮮血が舞う。

だが怪我を負ったのはセイバーだ。

直感に身を任せ体をひねった。それは正解である。ランサーの槍はまるで無いかの如く貫いた。

ゴロゴロと地を転がり距離を取る。

立ち上がって構える。その脇腹には浅いが槍による一撃が刻まれていた。

「セイバー!!」

アイリスフィールがセイバーに近づき治癒魔術を掛ける。

「有難う御座いますアイリスフィール。治癒は効いてます。」

どうやら痛みは残っているらしい。

「やはり易々と勝ちを獲らせてはくれぬか……。」

そうランサーは言うがその顔に苦渋の色はない。むしろ良くよけたと喜悅の表情を浮かべている。

直感で致命傷をさけることができたセイバーは一つの答えに辿りついた。

……あの赤い槍の能力は、おそらく魔力の破壊。

それならば先程インビジブル？エアを無効化されたのも、自身の鎧を苦も無く貫いたのも納得できる。

打ち合いで、破壊することができるのは。穂先のみのような。サーヴァントの戦いに魔力のない戦いはありえない。各々の魔力量が戦闘に重大な影響を与える聖杯戦争では極めて有用性の高い宝具だろう。

……どこその漫画ではハリセンだったりするが。

ならばと思いセイバーは鎧を散らす。

鎧が意味を成さないのならばその分を自身のスキル「魔力放出」につぎ込み、身体強化した方がいいとセイバーは判断した。

「その勇敢さ。潔い決断。決して嫌いではないが……この場に限って言わせてもらえば、それは失策だったぞセイバー。」

「さてどうだか。諫言は、次の打ち込みを受けてからにしてもらおうか。」

そしてセイバーはランサーに突貫する。

安西先生、出番がないです。（後書き）

dsでは400字しか書けないという罫。
うぼあ

あれ、また出番無しですかぁ？（前書き）

宗教で23の5:00から24の5:00まで滋賀に行っていました。
移動の時一人「ドキドキ 八時間耐久！乗り物酔いで吐くのをいつ
までもつかな」をしていました。

あ、そうそう、バスの中で塔の上のラプンツェル見ました。
マキシマム高性能すぎる

あれ、また出番無しですかあ？

再び蝶の如く舞う血飛沫。

互いに傷は負った両者は距離をとる。

セイバーは直感で身を捻り串刺しを避けることができたものの、完全にはよけることはできずに左腕にランサーの放り捨てられた短槍で傷を負った。

ランサーもセイバーが体勢を崩したことにより必殺は避けることができた。

どちらも負った傷は浅い。

ランサーは時間を巻き戻すが如く高速で傷が塞がるが、セイバーはアイリスフィールが治癒魔術を使用しても左腕の傷は塞がらない。

「我が『破魔の紅薔薇』ゲイ・ジャルグが前にして、鎧が無為だと悟った迄はよかったな。が、鎧を捨てたのは早計だった。そうでなければ『ゲイ・ボウ（必滅の黄薔薇）』は防げたものを。」

最早隠すこともないと己の宝具の真名を明かす。そして次に見せたかまえば戦闘開始時と同じ二本の槍の彼が生涯をかけ修得した二槍流の構えであった。

魔力を打ち消す紅槍と決して癒やさぬ傷をつける黄槍。

ここまでくると断定出来る。アーサー王伝説にも関わりのあるケルト神話に綴られるその英雄の名前は……。

「成る程、もっと早くに気づくべきだった……。フィオナ騎士団、随一の戦士……“輝く貌”のディルムッド・オディナ。まさか手合わせの栄に与るとは思いませんでした。」

「何、誇れ高いのは俺の方だ、セイバー。」

かの名高き騎士王と鏖競り合って、一矢報いるまでに至ったとは……フン、どうやらこの俺も捨てたものではないらしい。」

真名を知られてもランサーの表情は清々しいものであった。互いの名が分かった今、ようやく騎士として尋常な勝負が始めることができる。

だが対照的にセイバーは内心で歯噛みをせざるをえなかった。左腕に受けた治癒不可能ではあるが浅い傷。だが左手の親指が動かない。腱をやられたのだろう。

これでは彼女の切り札であるエクスカリバーを使うことができない。両手で満足に握ることが出来なければ発動の反動に耐えることができずに後ろへと飛んでいってしまうのだ。

金の大筋の光を剣から出しながら飛ぶ少女。

……シニールである。

だがセイバーの闘志には微塵の揺らぎもない。むしろ終戦でこれだけの強敵と対峙したことで、益々の昂りを見せている。

そしてその闘気はランサーにもとどいていた。ランサーもセイバー同様、生粋の騎士であるランサーもこの状況でなお全く戦意の衰えないセイバーに畏敬と歓喜を感じているのだ。

「覚悟しろセイバー。次は獲るぞ。」

「それは私に獲られなかったときの話だぞランサー。」

二人共壮絶な笑みをうかべ、間合いを詰める。機を伺い合うことd
生まれた静寂は、冷たく緊迫した空気を作り出していた。

だがしかし
駄菓子菓子。

チャリオット

雷鳴が響き二頭の逞しく美しい牡牛にひかれた戦車が紫電をスパークさせながら空を駆けてくる。蹄と車輪が空中を蹴る度に大気が震える。

これ程の圧力は宝具以外ありえない。

そして雷電を纏った戦車はランサーとセイバーの中間に降りたつた。

着地と同時に紫電は収まり、御者台に乗る巨漢があらわになった。

「双方、武器を収めよ。王の御前である。」

突如響く大音量。戦車を駆っていたであろうその男から発せられた声は物理的な圧力を伴い周囲に響き渡る。

だがランサーもセイバーも名にし負う兵。この程度では怯みもしない。

両者とも油断なく偉丈夫を見据える。

「我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した。」

瞬間、一部のぼわぼわしたところを除き再び静寂に満ちた。

あれ、また出番無しですかぁ？（後書き）

オリ主のモデルはプーさんです。

日ランキングの連載で10位だったのにびっくらぎょうつてん。
まだ乗り物酔いが残っているのかと思った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6125z/>

最硬の肉体を持つ一般人

2011年12月24日08時52分発行